

本書は、日本法史（前近代）の入門書として執筆されたものであるが、同時にまた、法史学は、現代の法律を学ぶ者にとって知る価値のない科目なのかという問い（プロローグ参照）に対する、私たち執筆者四人なりの答えでもある。

本書の各講は、その専門分野などを考慮して、執筆を分担した（執筆者紹介参照）。しかし、テーマの選定や成稿に至る過程で、相互に意見を出し合い、大幅な加筆修正を行った箇所も少なくないから、叙述内容全般についての最終的な責任は、編者である村上と西村の二人にある。

本書で取り上げた一九のテーマは、日本法史学における重要問題のなかの、ほんの一部にすぎない。しかも、どのテーマについても、先学による豊富な研究の蓄積がある。本書は、従来の概説書のような、時代ごとの体系的な叙述スタイルをとらず、現代の法制度からみて特に興味深いと思われる、トピック的なテーマを設定した点に特徴があるが、さらに、西洋法史からみた日本法史の特質についてコメント欄を設けたことも、他書にはみられない新しい試みである。各講では、できるだけ標準的な史料を用い、適宜、ルビや傍線を付すなどして、分かり易く叙述するよう心掛けたが、ときには通説にこだわらず、多少難解でも、執筆者の見解を前面に押し出した場合もある。もともと、限られた紙面では、理解の前提として必要な、その時代の社会・経済状況や法・裁判制度の全体構造などについて詳しい説明をする余裕はなかったので、これらに関しては、次に掲げる基本文

献を参照してほしい。

●基本文献（一九七〇年以降のもの）

朝尾直弘・網野善彦・山口啓二・吉田孝編『日本の社会史』全八巻（岩波書店、一九八六―八八年）

石井良助『日本法制史概説〔改版〕』（創文社、一九七一年）

同『略説日本国家史』（東京大学出版会、一九七二年）

大竹秀男・牧英正編『日本法制史』（青林書院新社、一九七五年）

牧英正・藤原明久編『日本法制史』（青林書院、一九九三年）

水林彪・大津透・新田一郎・大藤修編『法社会史』（山川出版社、二〇〇一年）

宮地正人・佐藤信・五味文彦・高荃利彦編『国家史』（山川出版社、二〇〇六年）

さらに、各講の末尾に掲げた参考文献や巻末の史料出典の一覧などを手掛かりにして、各自で、問題点を掘り下げていってくれればと願っている。本書が、法史学を学ぶ愉しみとその存在意義を知ってもらおう契機となれば、執筆者一同、これに勝る喜びはない。

本書は、企画の段階から岡村勉前社長から熱心な助言をいただき、秋山泰現社長からもご理解を得た。また実際の編集作業では、舟木和久氏が、終始、忍耐強く付き合ってくれた。厚くお礼を申し上げたい。

二〇〇九年九月

執筆者を代表して

村上一博